

た。米軍人がいて、在ソの話、帰宅後の身近な話を聞かれた。寒いにお茶も出さず、持参の弁当で午前十時〜午後三時ごろまで事情聴取されました。帰ってきたものの仕事も無く困りました。

同じような呼び出しは翌年の二月ころにもありました。

十九年七月より二十四年十一月五日までの留守が良い思い出になっており、食物の儉約、物を大切にする気持ちかわいてきます。仕事も真剣にやり、また農地解放の話を知り、今まで宅地も無く昔の水のみ百姓が一躍大地主となり、区長や農家組合長等も受けた。

【執筆者の紹介】

現住所 福井県大野市堂本

生年月日 大正十年三月二十五日

昭和十七年四月 敦賀第三十六部隊に入隊

〃 十九年七月 〃

〃 〃 色丹島に転出

〃 二十年八月 入ソ抑留地ムリ、ソフガワニ
〃 二十四年十一月 帰国 以後家業に従事

区長、東部土地改良委員、
農家実行組合長等を歴任
(福井県 林 俊男)

太平洋戦争とシベリア抑留記

長野県 大沢 正人

太平洋戦争も黄昏を迎える昭和十八(一九四三)年八月徴兵検査甲種合格。十九年一月八日、永年住み慣れた郷土を村中の皆さんに送られて出発。高崎東部三十八部隊に十日入隊す。伊那方面より二百余人、県下各地より大勢の現役が入隊。それぞれ各内務班へ配分された。私は重機関銃中隊に配属され、重機は二十三人と他の一般小隊より少ない。早速真新しい一装用が支給され、今ま

で着ていた衣服は故郷へ送るよう指示あり手配す。

翌日より点呼体操の後、新兵全員高崎観音まで早馳、約一里くらいあったと思う。ごわごわの服、ぶかぶかの靴で大変だった。いよいよ明日は出発と知らされた、たしか二十四、五日ごろだったと思う。夕刻宮庭に整列、隊列を整えて駅へと向かう。大した見送りの無く乗車。車窓もよろい戸を下ろして南へと向かい進む。翌日夕方博多へ着いた。雨が降っていた。雨の中で乗船。馬が先に、私たちは後。船中はぎゅうぎゅうで身動きできないほど。天候は悪く波も高く、夜になつての出発。玄界灘でもみくちやにされ、皆洗面器を抱えきり。翌朝無事釜山港に着くも、上陸してもふらふら一日じゅうしていた。釜山の駅より乗車、鴨緑江を渡り、奉天山海関を経て天津郎坊に到着、下車。郎坊の兵舎にて一泊す。内地より北支の方がちよつと寒い。朝食後、各それぞれの隊よりの迎えのトラックにて各警備地へと別れて出

発。銃に弾込めして警戒しつつ進む。物すごい黄砂を巻き上げ進む。目も明けていられないくらいであった。夕方ようやく無事に任地に到着す。任地は北支「新安鎮」。

北支派遣陣第四二八六部隊（独歩二十五大隊）機関銃中隊森隊に入隊し、いよいよ一期の教育を受ける。二個分隊、自分は一分隊にて教育三カ月の教育も終わり、それぞれ各内務班に別れて入り、討伐作戦等に出る。そのうち一息つく間もなく四月末には河南作戦、京漢作戦参加の命が下り、直ちに出発。京漢線にて中支鄭州新郷で下車、一夜砂原で野営し、いよいよあの濁流黄河を一時間もかかって渡り、泥水より膝まで沈む黄土の中を昼夜兼行の行軍にて一カ月がかりの進軍にて先行部隊の後を追う。洛陽へ着くと同時に戦闘が始まる。菊兵团編入後一号作戦に動員され、洛陽攻略戦、洛陽城本且駅より攻略す。支那大陸での作戦では一番大きな作戦であると言われた。

洛陽城攻略後、敵を追い陣地を作つて半月くら

い警備をしていたが、我が部隊は菊兵团編入を解かれ前警備地の河北省新鎮雄県付近の守備や討伐に専念するが、戦雲いよいよ急を告げる六月末、ソ連に対応するため六十三師団の指揮下に入り通遼に転進、貨車に陣地を構えて機動部隊として警備、奉天糧秣廠にて警備中、同年八月ソ連参戦に伴い百戦効なく終戦を迎えた。

糧秣廠での終戦のため食べ物、衣服等たくさんあり、どうせロシア人に行かれてるので、持てるだけ持って、この先どうなるともわからず、雨の中二、三日間さまよい歩き北陵大学に集結、そして武装解除される。その後二週間くらいして牛馬同様二段仕切りの板の上、すし詰めで奉天(瀋陽)より黒河を経てブラゴエシチェンスクへと渡り、ソ連兵の監視下でみじめな俘虜旅が始まる。黒河を通るとき黒河の駅や鉄道があめの棒のごとくくしゃくしゃになっていて、ソ連軍進攻激戦のさま、うかがわれる。

貨車に乗るとき「ヤポンスキ東京ダモイ」と言

われ、シベリア鉄道でウラジオ経由で帰すのかなと思いが、どうも進む方向が西へ西へと進む。これはだまされたと思うもどうすることもできない口惜しさ、ただただ貨車の進むに任せているよりしようがない。皆あきらめてか無言で寝ころんでいるのみ。駅で止まったとき歩哨に尋ね、チタ

かと聞くと歩哨うなずく。やはりシベリア奥地へと連行されるのだと思える、どうでも勝手にしやあがれだ。また何日か進むと広い海のような湖、二、三日がかりで通過。また広いツンドラの荒野原、気の遠くなるような思い。広い湖面は一面に氷結していて、大きな船も氷で物すごく高く持ち上がっていた。広い氷原を近道にして大型のトラックが行き来している、珍しい景色だ。

九月中旬というのにもう真冬だ。雪もちらついて寒さが身にしみる。板の床に寝ていて背中が痛い。満州を出てから、かれこれ一カ月たつころと思えるが、我々の仕事場チェレンホーボー第一收容所に着いた。荒れた大地に、鉄条網に囲まれ、

四隅には自動小銃を手に歩哨が立っていた。半地下式に建てられた兵舎が三十数棟建っていた。

いよいよ来るところまで来たのだと観念せざるを得ない。我々一行一千五百人は、収容所の前に整列をさせられ何時間も待たされ、三時間余待ったころ、全員持ち物は全部置いてラーゲル内に追いつ込まれ、大勢のソ連兵にこづかれ、戸を閉められる、はるばる満州の糧秣廠より骨を折り持つて来たもの一物残らず没収さる。あまりにも卑劣きわまりない行為だ。本当に武器があればそうはさせないものをと口惜しさ募るばかり。夜に一枚の毛布と飯ごうが渡されて捕虜生活が始まる。

毎日後続の部隊がどんどん入って来て、大混乱となる。これではどうにもできないありさまで、ソ連側は連れて来ても設備が間に合わず、当分がやがやごたごたの連続で、食も出ず水もなく便所も少なく、そんな中で自分たちでだんだん整備していった。とにかく食糧が出ず、たまに十五人に一個くらいの黒パン約二センチくらいの厚さの

が出るくらい、これで生きていけるのかと思われた。そのうちにだんだんと準備もでき、炊事もできるようになる。だが充分に腹は満たされない。

満州より持ち込まれた雑穀をそのままの形で出されたり、米もそのまま炊いて出され、これでは一粒一粒皮をむいて食べる始末。そのうちソ連側と交渉して皮むきのうす、とうみ等作られ、だんだん整ってきた量が足らない。ともかくもとも食糧のないシベリアへ、六十万いや百万というような人数を連れて来て、行き渡るはずがない。

そのうちにぼつぼつ作業に出るための身体検査が始まった。一級、二級、三級、OKと四段階に分け、自分は一級で炭坑作業と決まる。一、二級は炭坑、三級は軽作業、OKは作業なし。一日三交代での作業。十一月ともなると零下10度一度と日増しにこたえる。ラーゲルを出て出番を待つ間、じつとしていられないほどの寒さで、頭もポーとして耳鳴りがする。収容所から四十分くらいで炭坑に着く。話ではこの炭坑は二十里四方、

いやもつとあると言われた。四、五十メートルも高さがある炭層は、何とも見事なものであり、一メートルくらいで土の層があり、真つ黒の無煙炭である。露天掘りのために寒いのが、穴の炭坑もあつた。石炭がまだ下に幾らでもあつて、水が出るとそのまま埋めていく。豊富なものである。石炭の層へドリルで穴をあけて、その中にダイナマイトを入れて爆破し、それをエンピ一丁でコンベアーに落とし貨車積みする。こんな仕事は二年くらい続いたが、腹三分ではやりきれたものではない。

十二月ごろよりシラミにより発疹チフス、また、赤痢大発生となり、それに加えて南京虫とささらぼうさら無理もない、一年余、着のみ着のままで、シラミ、ノミの発生は当然だろう。板の間にはシラミがぼろぼろと落ちていた。これでは作業に出るものが無くなり、ソ連も大慌てだが、薬もなく、毛布衣類を外の庭に干して殺すとやってみたが効果は無し。室内へ入れると真つ白に

凍っていたのが動きだす始末。全く手のつけようもない。室内はペチカがごうごうと暖かいので南京虫、シラミ、ノミで栄養も取れない体を食われて、チフス、赤痢、栄養失調にばたばたと死亡していった。このままでは手もつけられない。ベッドの上にならずと死体が並び、屍室に何一つけない死体の山がいく山も作られていた。これでは皆全滅するのかわかると思われる。自分も赤痢になつて炭を食べていた。幸いに同じ村から一緒の同年兵の衛生兵がいたので、無理やり少ないクレオソートで治していた。

二月、三月と一段と寒さも加わつて死亡者続出で作業に出る者もなく、何百人ともなく屍室は天井まで全裸の死体で入れる所のないありさま。骨に皮がついているだけのミイラ状のこちこちの屍、全く見たこともない、ただただ驚いて声も出ないありさま。運んで来るとき屍を積み上げると凍っているのでカランカランと音がする。ただただ呆然と見ているばかりでした。身内の人には話

もできない、この厳冬では穴掘りの作業も進まず、埋葬もすることができない。

そうしているうちに段々と春も近づき暖かくなりつつあり、衣服等も滅菌消毒されるようになり、シラミ退治、風呂、シャワー等時々できるようになり、死亡者も段々と少なくなり、また生き残っている者は作業に出るようになった。食の方は相変わらずで、黒パン一切れと飯ごうの中ぶた八分目のスープではとても足りず、春となりそろそろタンポポ、アカザを争って採り、食べられるようなものは何でも茹でて食べた。伐採作業に出ている人たちは、山に入りキノコ等を採って食べて気が違ったり死亡する者も多く出たと言われた。このような寒さと飢餓の連続であり、こんな環境の中で人間としての極限の生活であり、今思うと実によく耐えてきたものと思える。このような中でよく二年また三年、長い人は四、五年、皆耐え長らえてきたものであった。

シベリアの冬季における気温は氷点下三〇度、

三五度前後はあり、服装は軍服の上に外套、防寒帽、防寒長靴、靴下の上にボロ布を巻き、手袋の上に二重三重の保護をして、顔も種々の布で覆い、目だけ出しているが、幾ら覆ってもシベリアの外気、寒風、粉雪の中の炭坑作業はつらい。かすかに、ぼんやりと太陽が南の方にあり、細かい小雪がキラキラと降る毎日、何の望みも慰めもない心細い生活。空腹と疲労に襲われ、明日の命も知れず、吐息もたちまち凍りつき、頭はジンジンと鳴って、まゆ毛も真っ白、口は硬直し、まつげは上下がひつついてしまうときもある。シベリアの厳冬は筆舌に尽くしがたい。体じゅうが針で刺されるような痛み、どこかへこのまま引き込まれるような気持ちになる。いつそのまま死んだ方が楽になれると思ったのは私一人ではないと思う。

このような思いで毎日を過ごしながら抑留二年半も過ぎたころダモイの話が出るようになってきて、働けない者から帰すといううわさがあり、私

も二年半はどうか炭坑作業をしてきたが、いよいよ栄養失調でOKとなり寝ていたが、ちょうどダモイ検査があり、帰されることとなる。このラーゲルでは一番初めのダモイとなる。

皆に別れを告げ、長い間の夢がかない、五月中旬ひよろひよろの体で念願の母国の土を踏むことができて、感無量であった。

戦後五十余年を過ぎ、記憶もうすれ、思うよう記すこともできないが、懐かしい軍隊生活、また苦しい抑留生活の一端、乱筆乱文にて記しました。

【執筆者の紹介】

大正十三年一月七日、飯島町に生まれる。家族は祖父母、両親、兄弟五人（男二人、女三人）

飯島小学校高等科を卒業

青年学校二年を卒業

職業は農業で、リンゴ、ナシ、水稻を主とする

昭和十八年徴集兵

昭和十九年一月十日 東部第三十八連隊入隊

〃 一月二十三日 高崎を出勤

〃 一月二十五日 博多港出航、同日釜山

港上陸

朝鮮―満州―北支へ

北支派遣軍陣第四二八六部隊（独立歩兵第二五大隊）機関銃中隊森隊に入隊

北支を転戦満州へ、これよりシベリア・チェレンホーボーへ

帰国後は自家で農業に働く

（長野県 長田 伊三男）

抑留記

岐阜県 永治 正

シベリアの中央部に日本の内地がすっぽりと入るほどに大きいバイカル湖という湖があります。その湖のほとりにイルクーツクという都市があ